

# 間瀬大工を追って

—盆唄に唄われる技の牙え

第七回

—手練りのふるさと間瀬—

手練りとは弥彦神が教示されたと伝承される、間瀬独特の漁法である。手練漁で沖合から見える弥彦、多宝の山脈、そしてこれらの山に重なる国境の粟ヶ岳、守門岳は、重なり具合で三枚ハギ（張り）と称する、小舟の位置を知るに、大切な指標の山々であるとともに、舟の上から合掌する、神や仏の棲む山々でもありました。そして間瀬の人たちにとっては、国境の山は子や兄弟などを偲ぶ山でもありました。

合掌する守門岳の裏側には、間瀬大工の出稼ぐ会津の地が広がっていました。

この守門岳の右腰を越えて裏側に往けば会津に至る。六十里越えと称される街道です。

左腰の下田村から会津に往けば、八十里越え街道となります。

会津に出稼ぎしていた大工「田島与一郎日記」に明治中頃の出稼ぐ様子が知れます。

—会津に往くには、四、五日、帰りは正月に間に合うようぎりぎりに先方を出て、深い雪道、寒気

厳しい山地を重い大工道具や土産を背負って泊まりを重ね、五、七

夕位かかって間瀬までたどりついた。——と書き残しています。舟の上から合掌する会津の里。南会

津郡田島村は日光街道沿いに位置し間瀬大工の出稼ぐ主要地、上州（群馬）や江戸に続いています。

国の重要無形民俗文化財指定の祇

園祭り屋台が伝統されるだけに、文化と経済力は相当に高かったと推察できそうです。しかし、この地方の社寺遺構は、全体的に小規模です。

神社本殿のほぼ全てが、一間社流造りの形式で、彫刻装飾は簡素であり、間瀬大工の堂宮大工技量、特異な彫刻技は十分に発揮されていません。

さびしい感はありませんが、紅梁、木鼻などの細部意匠は極めて個性が強く、量感のある仕上がりで間瀬大工の個性があらわれています。

小ぢんまりとした中、これらの部分に龍の題材を主体とした彫刻を施し、立体

感、荘厳性を表現しています。

これらの素晴らしさは、この地の人たちにも理解され、盆踊り唄に「ハマの棟梁、祇園屋台で引いてみたい、（男）ぶりは悪いが、腕はたつ（龍）」とあります。

この唄は間瀬大工の姿を的確に表現しています。

真面目で朴訥な人柄と確かな技量、追隨を許さない大工彫刻の題材の龍（たつ）と腕の牙えを表現しています。

越後のハマ大工の確かな仕事仕様、バランスのとれた立体的な感、風雪に耐えて、歪みなど無く、彼らの技と意地はこの地にしっかりと生きています。その遺構は表1のとおりです。

ここに注目することは、南泉寺鐘樓門が能登の本誓寺と同年代に、建立されていることです。

これは、この時代に間瀬大工が広範囲の地域に出稼ぎしていたことが推測できます。

天豊稲荷神社の棟梁阿部清蔵は三十三歳の棟梁でした。通称久四郎のムコ棟梁、

この長男久吉（嘉

表1 田島町社寺建築にみられる間瀬大工

建築名	建立年	西暦	棟梁
南泉寺鐘樓門	寛政6年	1796	田中善八
龍福寺本堂	文化7年	1810	幸邑善右衛門
藤生寺本堂	文化8年	1811	幸村伝蔵
雷電神社本殿	文化年間	1816頃	山添二之助真重
蚕桑稲荷神社本殿	嘉永3年	1850	柏原源蔵義紀
熊野神社本殿	嘉永7年	1854	柏原佐太郎
瀧口神社本殿	安政6年	1859	柏原佐太郎
天豊稲荷神社本殿	文化2年	1862	阿部清蔵

永二年生）は、この稲荷社の遷宮式にはまだ子供の十三歳でした。七歳の頃より父について、使い走り、仕事の段取りなど、厳しく仕込まれました。

明治四年、二十二歳の久吉青年は祖父の久四郎を名乗り函館に渡りました。

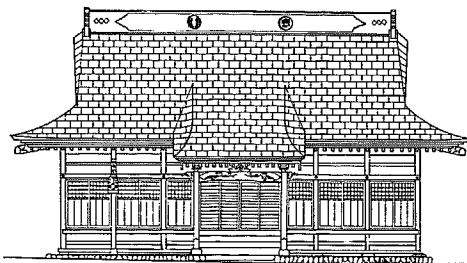
焼土となった間瀬（八月号掲載）に、青森から走りになり、失意にうずくまる祖父を助けたあの青年です。

幼い頃、父に仕込まれた才覚は、札幌を代表する事業家として成長します。多くの人々を間瀬から呼び寄せました。今は彼の開花、咲き誇る様だけが、語り伝えられています。

（岩室村生涯学習推進本部）



南泉寺鐘樓（町文化財指定）



藤生寺  
平成5年わたしたちが、再度訪れたときは、焼失していた

この長男久吉（嘉